

チャイナタウンの形

～長崎唐人屋敷・横浜中華街・池袋チャイナタウンの空間構造、変化と連続性～

中谷礼仁研究室 2019.11.08

1X16A028-8 王 琦

論文構成

<序論>

第一章 本研究について

- 1-1 はじめに
- 1-2 研究背景
- 1-3 研究目的
- 1-4 先行研究と本研究の位置づけ
- 1-5 研究対象
- 1-6 研究方法
- 1-7 論文構成
- 1-8 用語の定義

<本論>

第二章 在日中国人史

- 2-0 はじめに
- 2-1 鎖国日本
 - 2-1-1 江戸以前の中国人移民事情
 - 2-1-2 近世の唐人社会
- 2-2 近代日本
 - 2-2-1 近代華僑社会の形成
 - 2-2-2 明治の「貧しい中国人」たち
 - 2-2-3 苦難と戦争へ
- 2-3 戦後日本
 - 2-3-1 華僑社会の復興と対立
 - 2-3-2 日中国交正常化以後
- 2-4 小結
 - 2-4-1 参考文献

第三章 長崎唐人屋敷

- 3-0 はじめに
- 3-1 設立背景
 - 3-1-1 キリスト教の伝播防止
 - 3-1-2 密輸防止と貿易干渉
 - 3-1-3 社会安定を図る
- 3-2 空間と营造
 - 3-2-1 唐人屋敷の建設経緯
 - 3-2-2 唐人屋敷の面積
 - 3-2-3 唐人屋敷の空間構成
 - 3-2-4 唐人屋敷の構成と沿革
- 3-3 小結
 - 3-3-1 参考文献

第四章 横浜中華街

- 4-0 はじめに
- 4-1 形成背景
 - 4-1-1 開国以降の横浜
 - 4-1-2 明治期の華僑
- 4-2 空間と营造
 - 4-2-1 横浜唐人町の形成経緯
 - 4-2-2 横浜唐人町の組織と建築物
 - 4-2-3 横浜中華街の構成と沿革
- 4-3 小結
 - 4-3-1 参考文献

第五章 池袋チャイナタウン

- 5-1 形成と沿革
 - 5-1-1 池袋チャイナタウンの時代背景
 - 5-1-2 池袋チャイナタウンの華僑社会
- 5-2 空間構成
 - 5-2-1 ニューチャイナタウンの空間構成
- 5-3 小結
 - 5-3-1 参考文献

第六章 チャイナタウンの変化と連続性

- 6-0 はじめに
- 6-1 唐人屋敷と中華街
 - 6-1-1 唐人屋敷と中華街の差異性
 - 6-1-2 唐人屋敷から中華街への連続性
- 6-2 中華街とニューチャイナタウン
 - 6-2-1 中華街とニューチャイナタウンの差異性
 - 6-2-2 中華街とニューチャイナタウンの連続性
- 6-3 チャイナタウンの形成原理についての考察
 - 6-3-1 これまでのチャイナタウンの発展と変化
 - 6-3-2 チャイナタウンの形成パターン
- 6-4 小結
 - 6-4-1 参考文献

<結論>

第七章 結論

<序論>第一章 本研究について

研究背景

本研究で取り扱う対象は、日本にあるチャイナタウンである。日本のチャイナタウンは、時代によって中心となる場所も形態も変わってきた。しかし、その歴史を巨視的に見ると、その変化には一定の規律が見えてくる。既存の研究では、それぞれの時代別場所別のチャイナタウンを個別対象としての研究がほとんどである。しかし、それだけでは全体の一貫性や連続性が見えなくなる。歴史という変化の目から見ては不十分と判断した。そこで、本研究ではそれぞれのチャイナタウンの空間構造を明らかにしたうえで、過去のチャイナタウンと時代先のチャイナタウンの交点に注目し、前後対象の変化や連続性を明らかにしたい。また、<人>と<場所>に対してそれぞれの分析により、彼らと彼らが生活する場所はどう変わってきたかを明らかにする。

研究目的

本研究の目的は以下3つにまとめられる。

- ①在日中国人の歴史を整理する
- ②チャイナタウンの形成背景や空間構造・変化を整理・考察する
- ③これまでのチャイナタウンの変化や連続性を提示する

研究目的

本研究で選定した研究対象は、時空間の幅から考えて、同じ方法で研究するには無理があると判断した。そこで、本研究では各研究対象別にそれぞれの状況に応じて研究方法を決定する。

第二章については、在日中国人の社会構成をキーワードに史料・先行研究を抽出・整理する。

<唐人屋敷>

唐人屋敷は現存しない上に、原址の転用による復元作業も困

難となっている。という理由で唐人屋敷の研究方法は先行研究も一部踏まえて、主に史料調査となる。唐人屋敷で使う史料は、江戸時代の儒者や長崎奉行、唐通事による当時の社会像や作者の体験談を記録したものが多。また、唐人屋敷の空間構造の変遷については、長崎県立歴史博物館館蔵の図絵を中心に分析を行う。その他、先行研究は主に江戸時代の日中貿易関係のものを参考する。加えて、唐人屋敷の面積測定など筆者だけでは実行でき難いところに関しては、先行研究の結論を引用する。

<横浜中華街>

早期横浜唐人町に関わる一次史料は、ほとんど関東大震災・第二次世界大戦を機に横浜市と一緒に焼失された。そのため、文字史料だけでなく、当時の図絵や中華会館・横浜開港資料館が編集した口述資料集や先行研究も活用して早期唐人町の構造を還元していく。関東大震災以降に発展してきた横浜中華街については、華僑社会という共同体から日本社会という大きな環境の影響を受けて空間構造への体現という立場から出発し、断続的な、年代別(-1923・1937-1945・1980-)の先行研究に対して、外国人居留地の図絵・衛星写真を活用し、華僑社会の居留地と周辺地域の空間比較という点から、チャイナタウンにある一貫性を探し出したい。

<池袋チャイナタウン>

池袋チャイナタウンは、形成されてからまた歴史が長くはないので、公開された一次史料は多くない。また、先行研究も元筑波大学教授山下清海の『池袋チャイナタウンー都内最大の新華僑街の実像に迫るー』(2010)という実測・口述資料に基づいた著作以外、極めて数少ない。そこで、本研究では池袋チャイナタウンの華僑社会の形成過程に焦点を与えて、加えて、現地調査でニューチャイナタウンの地図作成による特徴を捉えてみる。

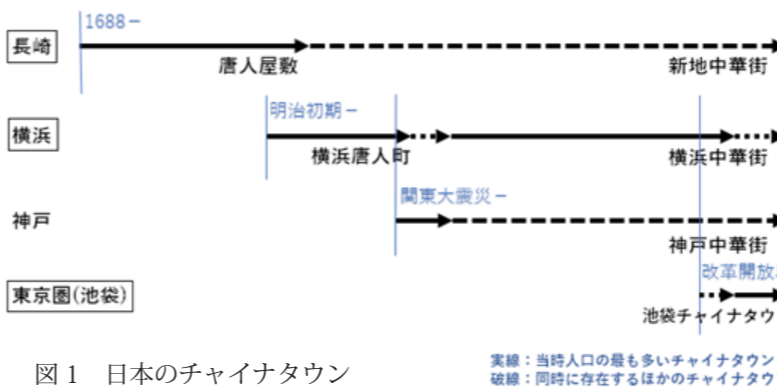


図1 日本のチャイナタウン

以上の分析や調査を踏まえて、チャイナタウンの歴史・空間構造・変化や連続性などについて比較研究を行う。最後に、全体の連続性について考察する。

<本論>第二章 在日中国人史

本章では、在日中国人の人口構成・来日背景を明らかにすることで、いままで在日中国人の歴史を確認した。本章の目的は、

各時代のチャイナタウンが形成・設立にいたるまでに在日中国人は何をもってまちを作ったのか、チャイナタウンそのものが時代の何を反応したか、その一端を明らかにすることであった。

研究対象である「唐人屋敷」「中華街」「ニューチャイナタウン」それぞれが該時代の主体チャイナタウンるように、日本の歴史を「鎖国」「近代」「戦後」三つの時代に分けた。各時代の在日中国人社会を中心に、その社会内部の構造変化・日本社会における位置づけを整理した。

<2-1>江戸初期、キリスト教や南蛮貿易の繫盛のおかげで、江戸時代の長崎港が貿易港として作られた。その後、長崎は独占となった。のち、唐人貿易も長崎に限定された。最終的に江戸時代の唐人屋敷は、幕府にとって「海外貿易をほぼ独占する唐人貿易」と「鎖国体制のへ変革」がぶつかる結果であるという結論にたどり着けた。

<2-2>に、近代日本の開国をきっかけに唐人が憧れる中華から外夷へ変質する歴史、日本の近代化による唐人社会から華僑社会への変容史を確認した。生きることを狙う貧困層が在日中国人の主体となり、彼らは欧米人との貿易経験を売りに開港場都市に移動し、生活し、ついに彼らを対象にサービスを提供する中国人も集まって、中国人の組織ができ、チャイナタウンと呼ばれるまちの形成につながった。また、日本と中国の戦争という外部圧力によって、日本へ留學生の初出現と華僑社会の組織化も確認した。

最後<2-3>に、戦後華僑社会が大陸の政治事情の影響を受け、分裂したこと、改革開放政策以降来日した新華僑の上流層・貧困層両極化、日本社会への参加意識で活動する新華僑と中華会館・華僑総会を中心に活動する老華僑の社会構造の違いを整理した。「東京中華街構想」事件をシンボルに、彼らと次の時代に来日した華僑ができたまち・華僑社会から日本社会への進出志向が確認できた。

<本論>第三章 唐人屋敷

本章では、江戸時代のチャイナタウン「唐人屋敷」の設立背景と所在地・空間構成・特徴について確認した。

唐人屋敷は、在日中国人が自発的に作ったものではなく、幕府が「唐人の収容施設」として作ったことが分かった。幕府が唐人屋敷をつくる目的として、キリスト教の伝播を防止すること、密輸の防止と貿易の干渉による日本人利益を保証すること、と社会の安定について考慮がある。それらを実現するため、唐人の集中管理・日本社会から隔離する施策として、長崎奉行やほか藩主2名が直接担当し、江戸に朝貢する御薬園の敷地で唐人屋敷を作り上げた。

唐人屋敷内部では、それ以前の唐人自治組織・郷幫の性格を継承し、同じ出身地の唐人がそれぞれ集まって宗教施設を屋敷内

部に建設した。これらの宗教施設は唐人屋敷の特徴であり、幕府から監視・隔離される生活で不満を解消する重要な手段でもある。

早期の唐人屋敷は単なる均一に長屋住宅を並んでいる収容施設である。火事の高発・宗教施設の増築・監視施設の強化によって、少しずつ空間構造が変わっていた。天明四年の大火災をきっかけに建て直し以降、唐人屋敷の空間構造が大きく変化した。唐人による自発的な商売が繁盛し、道路や宗教施設も全部整備された。住居・商売・文化宗教施設・回遊道路のように明確な分化した空間構造を持つ都市的なものへ変容した。

末期の唐人屋敷は新しい勢力が台頭する一方、建物が老朽化、貿易が衰退した。やがて明治二年(1870)の火災で、180年以上にわたる歴史に終止符が打たれた。

表1 本研究で扱う図絵一覧表			
絵図	面積(坪)	推定年代	タイプ
御普請方絵図	8015坪半	元禄七年以降－享保五年以前	早期
唐人屋敷図	8016坪半	享保六年以降－元文元年以前	早期
唐人屋敷景	9383坪余	安永九年(1780)	早期
唐人屋舗	9383坪余	天明五年(1785)	晩期
長崎諸御役場絵図	9383坪余	天明五年以降－嘉永二年以前	晩期
長崎諸役所絵図	9383坪余	嘉永二年(1849)	晩期

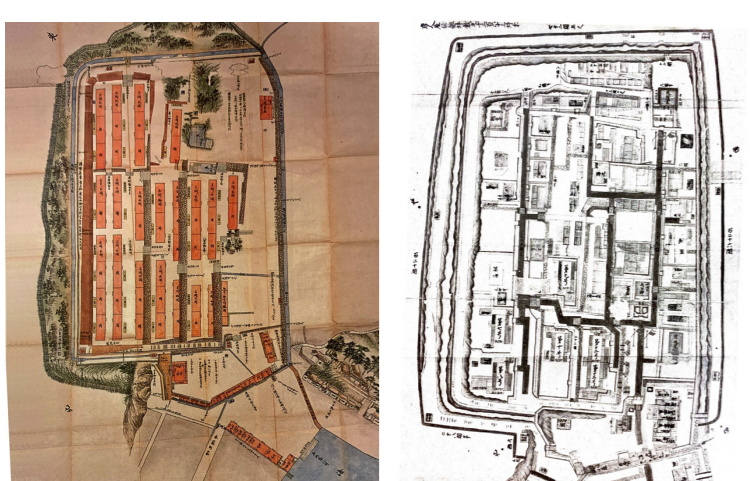


図2 御普請方絵図(早期唐人屋敷) 図3 長崎諸役所絵図(晩期唐人屋敷)

<本論>第四章 横浜中華街

本章では、開国以降のチャイナタウン「横浜中華街」の形成背景と空間構成・特徴について確認した。

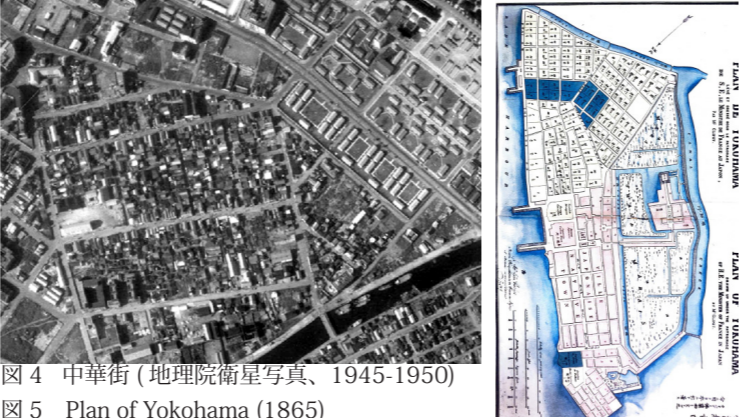
中華街は開国によって長崎が貿易独占地位を失った後、日本全国範囲の開港場の外国人居留地で自発的に形成した在日中国人の居留地である。横浜中華街は其中で最も規模の大きなものである。その形成理由として横浜が貿易港としての優勢と在日中国人の人口・身分構成の貧民化・多様化につながる。

横浜中華街は、戦後観光地としてブランドを出すまで、公式的に「中華街」というものが存在しなかった。初期の横浜中華街は開国時代、中国人貿易関係者が横浜に集まることから始めた。貿易関係者を対象にサービスを提供する華僑が次第に集まって、やがて組織・建築物の整備による中国人が集中化した。日清修好条規に

よる領事館の設立をきっかけに、「中国人が集まる地域」として知られていた。その後、関東大震災で欧米人の大量帰国をきっかけにこの地域は中国人への純化が始まったが、戦時、日本政府による貿易の実質停止し、空襲で瓦礫と化した。

表2 1877-1884年横浜・全開港場における外国人口及び割合*						
年次	横浜(人数)		全開港場(人数)		割合(横浜/全開港場)	
	欧米人	中国人	欧米人	中国人	欧米人	中国人
1877	1959	1142	2492	2107	56%	64%
1878	1870	1850	2477	3028	56%	61%
1879	1894	2245	2398	3849	58%	62%
1880	1876	2505	2358	3584	58%	70%
1881	1498	2245	2558	3558	58%	63%
1882	1866	2155	2351	3545	58%	61%
1883	1287	2681	2382	4188	54%	65%
1884	1229	2471	2388	3789	51%	68%

戦後、戦勝国民として土地権力が確保され、ようやく現在に至る横浜中華街の空間構造の異質化が発生し始めた。闇市やGHQの肉食需要をきっかけに食の街へとして再建し、1970年代横浜市長の観光地提案や周辺の観光地化大規模再開発による風水思想に基づいた明確な限界ができた。そして、2000年代以降、提案された「中華料理の店」「観光地」のアイデンティティ自体が「横浜中華街」に受け入れられ、2006年媽祖廟の建設を持って横浜中華街の空間構造が定格した。



<本論>第五章 池袋チャイナタウン

本章では、日本で最初のニューチャイナタウンである池袋チャイナタウンの特色について、地価の低下や留学生政策をきっかけに形成した過程、華僑社会だけが対象であったエスニックビジネスが日本社会への展開、新華僑と地元の日本人コミュニティとの関係を中心に整理してきた。さらに、現地調査による店などの空間構造を分析し、池袋華僑社会の構成を考察した。これまでの中華街は、多数の日本人観光客を集める当該地域の重要な観光地として発展してきた。これに対して、新華僑が作った池袋チャイナタウンは1990年代以降形成された華僑の生活を中心にしたチャイナタウンである。しかし、彼らは今までの中華街と違って、自ら日本社会への参加を志望している。華僑社会と日本社会の関係性を次のページに開く試みとして注目されている。



図6 池袋チャイナタウン

<本論>第六章 チャイナタウンの変化と連続性

本章ではこれまでの在日中国人社会とチャイナタウン分析・整理に基づいて、まず「唐人屋敷と横浜中華街」、「横浜中華街と池袋チャイナタウン」それぞれを比較した上で、チャイナタウン全体の変化や連続性を考察した。

結論として、人の面では、在日中国人の主要活動が貿易から生活へ移行したこと、在日中国人社会の構成が単純化から複雑化へ発展したことを確認できた。

場所の面では、チャイナタウン建築物により華僑組織の成立から、建築物と組織の分離への発展と、チャイナタウンの形式が「建てる」ものから「借りる」ものへの無形化プロセスを確認できた。

最後に、以下のようなチャイナタウンが共通する4つの段階の形成パターンの仮説を提案した。

チャイナタウンの前提条件：在日中国人の中間層・貧困層

①萌芽期：住宅地に中国人同士が点在する

条件：平均より安い家賃、在日中国人にとって交通の便利性

例：芝園団地

②草創期：同胞相手を中心にサービス提供する店舗が現れ、集中する

条件:人口密度が低い、マイナスの印象をもつ（あるいは無印象）場所として認知

例：高田馬場、錦糸町

③過渡期：同胞相手を中心とするサービスだけでなく、日本人客対象の経営戦略の展開

条件：日本人にとって交通の便利性、ビジネス優位性の確立

例：池袋、西川口

④成熟期：観光地化、中国人の分離化

条件：地元コミュニティの弱体化・無存在化、華僑の資産化

例：三大中華街

参考文献・図版

本論文で参考した資料や著作は以下となる。

<史料>

司馬遷『史記・淮南衡山列伝』巻118 第五十八(1959)、中華書局

魏征等『隋書・東夷列伝』(1973)、中華書局

呉廷燮『明督撫年表』(下)(1982)、中華書局

長崎県史編集委員会『長崎県史・対外交渉編』(1968)、吉川弘文館

石井良助編『徳川禁令考』(1983)、創文社

林春勝、林信篤『華夷変態』巻1

長崎県史編集委員会編『華蛮交易明細記』『長崎県史・史料編(第四)』(1965)、吉川弘文館

横浜市編『横浜市史』巻3下(1963)、東京図書印刷株式会社

外交資料館所蔵外務省記録「大正13年帝国労働政策及法規関係雑件」M.T.3.7.1.5-1

国家檔案局明清檔案館編『戊戌变法檔案史料』(1958)、中華書局

外務省情報部編『現代中華民国満洲国人名鑑.昭和7年版』(1932)、東亜同文会調査編集部

長崎県立長崎図書館編『幕末・明治期における長崎居留地外国人名簿』3(2004)、昭和堂

日本華僑華人研究会編『日本華僑・留学生運動史』(2007)、中華書店

警察庁『平成2年警察白書』

横浜市役所市史編纂係編『横浜市震災誌』第二冊(1926)

丹羽漢吉等編『長崎港草』『長崎文献叢書』第一集第一巻(1973)、長崎文献社

丹羽漢吉等編『長崎実録大成』『長崎文献叢書』第一集第二巻(1973)、長崎文献社

饒田諭義等編『長崎名勝図絵』『長崎文献業書』第一集第三巻(1974)、長崎文献社

松浦東溪著、森永種夫校訂『長崎古今集覽』(下巻)『長崎文献業書』第二集第三巻(1976)、長崎文献社

東京大学史料編纂所編『大日本近世史料[3] 唐通事会所日録1』(1984)、東京大学出版社

東京大学史料編纂所編『大日本近世史料[3] 唐通事会所日録3』(1984)、東京大学出版社

大岡清相著、中村質等校訂『崎陽群談』(1974)、近藤出版社

森永種夫編『犯科帳：長崎奉行所判決記録』第1巻(1958)、犯科帳刊行会

矢野仁一編『長崎市史』(通交貿易編 東洋諸国部)(1981)、清文堂出版

林復斎編『通航一覽』(5)(1913)、泰山社

汪鵬『袖海編』『昭代叢書』續編卷第二十九(1990)、上海古籍出版社

陳東華著、長崎県立長崎図書館編『長崎居留地の中国人社会』『幕末・明治期における長崎居留

地外国人名簿』(3)(2004)、昭和堂

松浦東溪『長崎記』

*不明『唐人番日記(参)』

永井規男『唐人屋敷 一街の構成一』『長崎唐館図集成—近世日中交渉史料集〈6〉』(関西大学東西学術研究所資料集刊)(2003)、関西大学出版部、p.204-218 他多数

<著作・論文>

池田温編『唐と日本—古代を考える』(1992)、吉川弘文館

五野井隆史『日本キリスト教史』(1990)、吉川弘文館

古賀十二郎『長崎開港史』(1957)、古賀十二郎翁遺稿刊行会

外山幹夫『大村純忠』(1981)、静山社

朝尾直弘『朝尾直弘著作集(第五巻)・鎖國』(全八巻)(2004)、岩波書店

根岸信『買辦制度の研究』(1948)、日本図書

山脇梯二郎『長崎の唐人貿易』(1964)、吉川弘文館

蒲地典子『明治初期の長崎華僑』『お茶の水史学』第20号(1997)、お茶の水女子大学文教育学部人文科学科比較歴史学コース内読史会

李国梁『長崎華僑史跡若干考察』『福建学刊』第19期(1990)

林陸朗『長崎唐通事』(2010)、長崎文献社

箭内健次『長崎』(1966)、至文堂

伊藤泉美『横浜華僑社会の形成』『横浜開港資料館紀要』第9号(1991)、横浜開港資料館編集委員会

齊藤多喜夫『横浜開港時の貿易事情』『横浜開港資料館紀要』第17号(1999)、横浜開港資料館編集委員会

西川武臣、伊藤泉美『開国日本と横浜中華街』(2002)、大修館書店

横浜開港資料館編集『横浜中華街—開港から震災へ』(1994)、横浜開港資料普及協会

彭雷霞『近代中国人的日本認識』(2013)、社会科学文献出版社、(2013)

実藤惠秀『近世日支交渉史』(1941)、大東出版社

土屋喬雄、玉城肇訳『ペルリ提督日本遠征記』(1948)、岩波文庫

菱谷武平『唐館の解体と変質』『長崎談叢』第59輯(1976)、長崎文献社

馬広秀『僑校近五十年変遷略記』横浜山中中華学校百年校志編輯委員会編『横浜山中中華学校百年校史:1898～2004』(2005)、横浜山中中華学園

譚璐美、劉傑『新華僑 老華僑 変容する日本の中国人社会』(2008)、文藝春秋

朱慧玲『日本華僑華人社会の変遷—日中国交正常化以後を中心として(新版)』(2013)、日本僑報社

山下清海『池袋チャイナタウン ～都内最大の新華僑街の実像に迫る』(2010)、洋泉社他多数<図版・表>

図1筆者作成 図2御普請方絵図 県立長崎歴史博物館所蔵

図3長崎諸役所絵図 県立長崎歴史博物館所蔵 図4地理院衛星写真より、筆者作成

図5 Plan of Yokohama(1865) 横浜開港資料館所蔵

図6 山下清海池袋チャイナタウンランチマップ(2010)に基づく筆者調査・加筆表1筆者作成 表2筆者作成